

國學院大學學術情報リポジトリ

書評 大谷歩著『万葉集の恋と語りの文芸史』：
すくすくと育ちつつある「若木」に期待する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶川, 信行, Kajiki, Nobuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000277

〔書評〕

大谷歩著 『万葉集の恋と語りの文芸史』

—すくすくと育ちつつある「若木」に期待する—

梶川信行

一、

若い研究者の本が、たまたま送られて来た。大谷氏の本もその一つであった。現在上代文学会の事務局を担当しているが、会員数の減少などを憂慮する日々が続いていることもあって、若い研究者の著作が次々と刊行されるのだが、ことさら悦ばしいことに思えた。「あとがき」によると、本書は学位

請求論文を基にしたものであると言う。学位を取得し、その成果を世に問おうとする姿勢に、まずは拍手を送りたい。もちろん、これがゴール地点ではない。次の飛躍のためのステップとなることを心から願っている。

本書の帯には、「日本人の恋の起源を解き明かす」「(古物語り)から(今物語り)へのラブヒストリー」というキャッチ・コピーが踊っている。また、

東アジア文学圏では特殊な、「恋」という概念を文芸上に成立させた日本。／その源流を求め、万葉以前より語り継がれた伝説〈古物語り〉から、／近時の現実性をもった〈今物語り〉へと至る物語りの形成の系譜を辿る／明かされる男女の恋の歴史。

という魅力的な説明もなされている。さらには、美しい装丁が、思わず手に取ってみたくなる吸引力を持っている。本書が上梓された時、著者は幸福感に浸ったのではないか。

そうした本書の目次は、以下の通り。六本の既発表の論文と二回の口頭発表の原稿を中心にまとめられたものだとされる。

はじめに

愛のはじまりの物語り 序論

第一章 磐姫皇后と但馬皇女の恋歌の形成

——〈類型〉と〈引用〉の流通性をめぐって

第二章 桜児・縷児をめぐる〈由縁〉の物語り

第三章 真間手児奈伝説歌の形成——歌の詠法を通して

第四章 嫉妬と怨情

——古代日中文学の愛情詩と主題の形成

第五章 怨恨歌の形成——〈棄婦〉という主題をめぐって

第六章 「係念」の恋——安貴王の歌と〈今物語り〉

第七章 「係恋」をめぐる恋物語りの形成

——「夫の君に恋ひたる歌」をめぐって

第八章 愚なる娘子

——「児部女王の嗤へる歌」をめぐって

頁をめくって見るまでは、國學院の学問的伝統と、辰巳イズムの融合の書だろうと予想していた。しかし、その予想は、いい意味で裏切られた。本書は、辰巳正明氏の正統な後継者であろうとすることを標榜するのように見える。『万葉集』の比較文学的研究の泰斗である優れた師の元で勉強できたことの幸せを、十分に堪能した成果であろう。

編集委員の谷口先生から「初期万葉だから、よろしく」と言われて引き受けたのだが、蓋を開けてみると、「本書では論証に多くの漢文文献や仏教経典を用いた」（おわりに）とされている。ならば、私を選んだのは、ミス・キャストではないか。

この本の書評は、漢文文献にも仏教経典にもうとい私の任ではないように思われる。とは言え、引き受けてしまった以上、伝統ある雑誌の企画に穴をあけるわけには行かない。門外漢の私

の目からどのように見えるのか。そんな書評もあつていいのかも知れないと思ひ直し、ペンを執る、いやキイ・ボードを叩くことにした。

二、

タイトルは魅力的で壮大だが、タイトルと中身の懸隔は大きい。本書に収録された八本の論文で、とうてい論じ尽くせるような事柄ではないからだ。一本の線で道筋が示されたに過ぎないが、大谷氏はまだ若い。したがって、今そのことを難じたところで、まったく意味がない。今後、たつぷりと時間をかけて、このテーマを追い求めて行くことで、このタイトルにふさわしい体系が構築され、一本の線が立体的な構造物となることを期待すればよい。

そのためには、自分をどこに置くか。スタートラインをどこに置いて、どの方向に走り出すかということが大切である。それが「序論」における研究史の確認であろう。大谷氏は、恋歌が形成される基盤には語りがあるとする立場から、伝説歌研究の古典とも言ふべき河村悦磨氏の『万葉集伝説歌考』（一九二七）から始める。続いて、五十年代は益田勝美氏の〈歌

語り〉論を、六十年代は伊藤博士の『万葉集』の〈歌語り〉の論を、七十年代は、それを批判した神野志隆光氏の論を、八十年代には伊藤論を擁護・修正した身崎寿氏の論を粗上に載せて行く。そして九十年代は、東アジアを広く見据え、中国少数民族の恋愛歌に《歌路》という原理を見つけ出した辰巳正明氏の論へと展開して行く、と捉えている。

大谷氏は、こうした流れの後に、二〇一〇年代の自分を置く。研究史の確認を見ても、辰巳氏の研究をどう消化し、発展させて行くかということに課しているのである。その意気やよし。筆者も陰ながら、その成長を見守つて行くことと思う。

さて、「序論」は実に盛りだくさんである。「本書の目的と方法」はとりわけ志の高さを見せているが、やや意気込み過ぎではないか。続く「由縁」をめぐる〈古物語り〉と〈今物語り〉こそが、本書の要諦と見られる。表紙の帯にもあつたように、ここが大谷氏の主張のもつとも集約されたところであろう。〈古物語り〉（今物語り）は、第一章以後の各論にも、繰り返し登場するチームである。新しいチームを導入することによって、『万葉集伝説歌考』以来の研究史を一步前に進めようと言うのである。

それらは「文芸史上の概念である」と言う。そして、

本書の〈古物語り〉と〈今物語り〉という概念は、歌のうたわれた場や口承の段階のみを想定する概念ではない。各作品の分析から導かれる作品の位置付けや、その背後に存在したであろう作歌の状況など、テキストから読み取り得る作品の性格分類の指標である。

とする。ところが、伊藤博の『万葉集』の〈歌語り〉の論を否定するのではないとも述べている。筆者などはむしろ、過去はバツサリ斬り捨てて、先に進んでほしいと願っているのだが、大谷氏は慎重な姿勢を見せる。

無責任に挑発するようなことを言ったのは、大谷氏自身が「本書では論証に多くの漢文文献や仏教経典を用いた」と述べ、第一章以下の各論で、確かにそうした方向で論じているからである。取り上げられた歌々も、巻十六の作品を論じた第六章から第八章を典型として、〈由縁〉が文字で書かれているものが中心である。「漢文文献や仏教経典」による「論証」は、当然「語り」ではなく、書かれた歌の世界の解明へと向かっている。それらは、どのように〈今物語り〉として記録されたのかということ、「論証」しようとしているように見える。その点で、過

去の〈歌語り〉論とは明らかに方向性を異にしている。とりわけ仏教経典を用いた「論証」は、『万葉集』という歌集を生むに至った文化的な基盤の幅広さ、奥深さを明らかにすることに繋がっていて、その点が過去の〈歌語り〉論などと違うところである。このあたりは、こういう方面の勉強をあまりして来なかった筆者にとつて、教えられるところが多かった。

一方、〈古物語り〉への論及はほとんどなされていない。ここで言う〈古〉が、どの程度の時間の隔たりを意味するのかは不明だが、〈古物語り〉がテキストの向こう側に存在したことは確かであろう。とすれば、それについては別の「論証」の方法が求められる。したがって、「多くの漢文文献や仏教経典」によつて〈今物語り〉について「論証」したとしても、それで〈古物語り〉を説明したことにはならない。「語りの文芸史」ならば、〈古物語り〉にこそ焦点が当てられなければならないのではないか。タイトルと中身の懸隔は相当に大きいと述べたのは、一つには、そうした大きな課題が残されていると思われたからである。

三、

否定的なことを述べたように見えるかも知れない。しかし、筆者はそれを本書の瑕疵だとは考えていない。筆者の世代とは異なり、今は課程博士の取得が必須の時代である。できるだけ早く学位を取得しなければ、研究者への道は開けない。若書きの本が多くなっているのも、当然のことであろう。

繰り返し返すが、たとえ細い線であっても、とりあえず道筋をつけ、将来への展望を見せなければ、なかなか未来は開けない。そういう意味で、本書には、将来への課題が自覚的にたくさん提示されているように思われる。何をどうすればいいのか、わかっているであろう。したがって、今後その課題を一つ一つ解決して行くことによって、真にタイトルにふさわしい体系が築かれるはずである。その着実な一歩が示されたということを評価したいと思う。

そこで、最後に老婆心ならぬ老爺心を。序論には〈今物語り〉と〈古物語り〉ばかりでなく、「民族」「文芸」など、さまざまなキーワードを用いて、たくさん課題が詰め込まれている。意気ごみは理解できるが、やや詰め込み過ぎなのではないか。

用語の定義と整理が必要であろうと思われる。また、恋歌は（女歌）の世界と言ってもよいが、はたして女性を主人公としたものだけが「恋の語り」なのか。安貴王の歌も取り上げられているものの、女性に偏り過ぎていないか。第三章で、題詞の「過」と「詠」の違いを論じているが、「過」に関して、大事な先行研究の見落としも気になった。

とは言え、読後感さわやかであった。本書によって、「若木」が順調に育ちつつあることが確認できたからである。本書が公刊されたことを心から寿ぎたいと思う。

（A5判、二九二頁、笠間書院、二〇一六年二月発行、定価五八〇〇円＋税）